

国語科学習指導案

府中町立府中中央小学校

教諭 鵜野 綾香

- 1 日 時 平成20年2月20日(水) 9:25~10:10
- 2 場 所
- 3 学 年 第4学年
- 4 単元名 語ろう・広げよう新美南吉の世界 「ごんぎつね」(新美南吉)
(東京書籍 新しい国語 四年下)
- 5 研修テーマ 叙述を基に想像しながら読む力を高める国語科学習指導の工夫
—小学校中学年の文学的文章を通して—

6 研修テーマとのかかわり

(1) 本単元でつきたい力の明確化と単元全体における指導計画の工夫

本単元でつきたい力を身に付けさせるために、単元全体における指導計画を工夫した。単元を二つに分け、第一部の学習においては、「語ろうごんぎつね」というテーマを設定した。「自分の好きな場面を心をこめて語る」という目的意識を持たせ、そのためにどの叙述に着目して想像しながら読めばよいかという学習課題を基に本文を読み進める計画を立てた。そして1時間ごとに一人読みの視点を持たせ、児童が読みの力を身に付けていくことができるようにした。第二部では、身に付けた読みの力を活用して新美南吉のその他の作品を読むという活動を設定した。

(2) 教材の特質を生かした、叙述を基に想像しながら読む力を高めるための学習指導の工夫

教材分析により「ごんぎつね」の教材の特質や着目させたい叙述などを明らかにし、叙述を基に想像しながら読む力を高めるために、「視点を捉えること」「表現を捉えること」の二つの観点を学習指導の工夫として取り上げた。そして、児童の一人読みにおいても、その観点にしたがって叙述を捉えさせることにより、叙述を基に想像しながら読む力が身に付くよう工夫した。

(3) 本時の授業における工夫

本時の学習では、着目させたい叙述を抽出し、「視点を捉えること」「表現を捉えること」を展開に位置付け、本時までの学習の読みで対比的に捉えてきた二人(ごんと兵十)の人物の関係を、二人の人物の行動や様子を表している叙述を基に想像しながら読ませていく。

7 単元について

○ 単元観

小学校学習指導要領解説国語編、第3学年及び第4学年の「C読むこと」の目標をうけて内容(1)ウには、「場面の移り変わりや情景を、叙述を基に想像しながら読むこと」とある。本単元は、場面の移り変わりや情景を叙述に即して想像しながら読むことをねらいとして設定した。また、新美南吉の他の作品を読み広げること、この作家の優れた描写や表現の工夫に触れ、物語を読み味わう活動につなげることを意図している。

本教材は、ひとりぼっちでいたずらばかりしている小ぎつねの「ごん」が、自分のいたずらのために兵十のおっかあを死なせてしまったと考え後悔しつぐないを行う。しかし、そのつぐないも兵十に理解されないまま、兵十にそのつぐないの主や意味がわかったのはごんをうってしまった後という悲しい結末に至る物語である。中心人物であるごんに同化しやすい表現や各場面にある巧みな情景描写は、場面と場面の関係に注意して、人物の気持ちの変化を想像しながら読むことを指導するのに適した教材である。また、五場面までごんの内面に同化したり共感したりしながら読み進めてきた読み手は、六場面で初めて兵十の内面を知ることになる。ここで読み手は、両者はいかに理解し合えていなかったかを思い知らされる。このような視点の設定は、この作品のテーマを効果的に表現しているといえる。さらに、二人の関係は各場面において対比的に描かれている。この表現と視点という二つの観点をおさえることで、人物や作品のイメージをより豊かに広げ、叙述を基に想像しながら読むことを指導できる教材である。

○ 児童観

これまで、文学的文章における特徴的な表現(比喩や声喩、色彩語、文末表現)や場面の様子を表す情景描写などに着目しながらイメージを広げ、人物の心情を想像しながら読むことをしてきた。また、作者と話を

区別し、語り手の語り方の特徴や人物に同化したり異化したりしながら読む活動を行ってきた。しかし、自力でその表現を見つけポイントとなる叙述を文脈の中に位置づけて、場面の移り変わりや情景を想像しながら読む力が十分身に付いていない。

○ 指導観

指導にあたっては、次のことに留意する。

一点目は、一から五場面までは、ごんの心や目に寄り添いながら同化して読ませる。ごんの行動や心情の変化を物語の場面の展開に位置づけ正確に読み取らせ、つぐないをしながら兵十に対し心を寄せていく様子やごんの内面の変化を、叙述を基に想像させる。

二点目は、情景描写に見られる表現の工夫に気付かせ、場面の様子をイメージ豊かに想像させる。音読や視写などを取り入れて、言葉の使われ方に着目させ、情景描写とそのときの人物の心情を重ね合わせ、より豊かに人物の気持ちや場面を想像しながら読ませるようにする。

三点目は、ごんと兵十の関係を対比的に捉えさせ、場面ごとのつながりや最初のいたずらから最後の場面までの展開を押さえる。ごんが自分のいたずらを後悔し、つぐないをするがそれが兵十に分かってもらえないという両者の間のずれを意識させる。各場面において、ごんと兵十が相互に理解し合えず、常に一方的な関係であることがわかる叙述に着目させたい。また、六場面からは初めて兵十の視点に切りかわる。六場面では、ごんの視点と兵十の視点が同時に表れ、悲劇的な出来事に出会うまで、ごん→兵十→ごん→兵十…と展開している。兵十の視点からの読みを十分行わせ、兵十の心内語や行動描写からごんに対する憎しみの気持ちやごんの行為を知って茫然とする兵十の思いを想像しながら読ませていきたい。

以上の三つの点に留意して、二人が死を通してしか分かり合えなかった悲劇、二人の間にあるすれ違いの悲しさを読み取らせていきたい。

8 単元の目標

- 進んで作品を読み、自分の考えや思ったことを話し合ったり書いたりしている。(国語への関心・意欲・態度)
- ごんと兵十を対比させながら両者の相手に対する認識の違いを読み取るとともに、人物の内面やその変化、各場面の情景を叙述を基に想像しながら読む。(読むことーウ)
- 表現したり理解したりするために必要な語句を増し、文中での使われ方や働き、表現の役割を理解する。(言語事項(1)ーエ(ア))

9 単元の評価規準

国語への関心・意欲・態度	読む能力	言語についての知識・理解・技能
① 進んで新美南吉の作品を読もうとしている。 ② 読み取ったことを基に、進んで話し合ったり表現しようとしていたりしている。	① 場面と場面の関係に注意してごんや兵十の気持ちの変化を、叙述を基に想像しながら読んでいる。 ② ごんと兵十の認識の違いやずれを対比的に捉え、二人が死を通じてしか分かり合えなかった悲しい結末を想像しながら読んでいる。	① 本文で使われているさまざまな表現方法や語りの文体を理解している。

10 指導と評価の計画(全14時間) 本時9/14

次	時	学習活動	評価の観点	評価規準	評価方法
---	---	------	-------	------	------

			関意	読む	言語		
一 (3)		三年生の時に学習した「手ぶくろを買いに」など新美南吉の作品が数多くあることを知り、学習計画を立てる。	◎			新美南吉の作品に興味を持ち、進んで学習しようとしている。 【関①】	発表
	①	～①語ろう「ごんぎつね」～ 好きな場面を心をこめて語ろう。語るために何をどのように読めばよいだろうか。 学習のポイント ①語や文に着目してごんや兵十の行動や気持ち、二人の相手に対する思いを比べながら読もう。 ②自分の好きな場面を心をこめて語るために、学習した読みの力を使って一人読みの力を身に付け、みんなで「ごんぎつね」を読み深めよう。				～②広げよう 新美南吉の世界～ 「ごんぎつね」で身に付けた読みの力を使って南吉のその他の作品を読んでみよう。 「手ぶくろを買いに」 「のら犬」 「花のき村と盗人たち」 「巨男の話」 「でんでんむし」「狐」など	
	①	教材文「ごんぎつね」を通読し、最も心に残ったことを中心に感想を話し合う。	◎			心に残った表現や場面、感想やみんなで考えてみたいことなどをノートに書いたり話し合ったりしている。 【関②】	ノート 発表
	①	構成や設定などを確かめ、音読練習をする。	◎			作品の構成や設定などをまとめたり、音読したりしている。 【関①】	ノート 音読
二 (6)	①	一場面の冒頭部分からごんの境遇といったずらについて読み取り、川べりを歩くごんの様子を情景描写を基に想像しながら読む。	◎	○		語りの特徴とごんに同化しながら読むことを理解するとともに、情景と人物の行動・心情を関わらせて想像しながら読んでいる。 【読①言①】	一人読み 発表
	①	ごんの目から見た兵十の様子を捉えるとともに、いたずらするごんの気持ちを兵十の行動と対比させながら読む。	◎	○		ごんのいたずらに対する気持ちや様子を、兵十の行動や場面の描写と関連づけ想像しながら読んでいる。 【読①】	一人読み 発表
	①	葬列が行く村の情景を読み取るとともに、兵十の母の死を知って自分のいたずらが原因だと後悔するごんの気持ちを想像しながら読む。	◎	○		葬列の様子を情景描写を基に読み取るとともに、いたずらを後悔するごんの気持ちを想像しながら読んでいる。 【読①】	一人読み 発表
	①	いわしやうなぎのつぐないを読み取り、兵十への思いが深まっていくごんの気持ちを想像しながら読む。	◎	○		ごんのつぐないの行動を読み取り、ごんの気持ちの変化を兵十の様子や前のいたずらを後悔する場面との関係に注意しながら想像している。 【読②】	一人読み 発表
	①	兵十と加助の後をつけたごんの様子からごんの気持ちを読み取るとともに、自分のつぐないや気持ちが兵十に伝わっていないことを不満に思うごんの気持ちを想像しながら読む。	◎	○		兵十と加助の会話を聞こうとして後をついていこうとした四場面と自分の行為が神様のしわざと言われた五場面でのごんの気持ちの変化を、叙述を基に想像している。 【読①】	一人読み 発表
	①	兵十のごんに対する心の変化に寄り添って読み進めるとともに、二人の間にあるすれ違いや	◎	○		兵十の気持ちに同化しながら読むとともに、ごんと兵十の認識の違いやすれを対比的に捉え、二	一人読み 音読

		心の交流について考える。 【本時】			人が死を通じてしか分かり合えなかった結末を想像しながら読んでいる。 【読①②】	
三 (3)	②	最も心に強く残った場面を選び、自分の思いが伝わるように工夫して音読する。	◎		叙述のどこをどのように音読するのか、工夫する根拠を考えて音読練習に取り組んでいる。 【関②】	発表 音読 ワークシート
	①	同じ場面を選んだグループごとに音読発表をする。	◎		友達の音読と自分の音読を聞き比べながらごんぎつねを味わっている。 【関②】	音読 発表
四 (2)	②	新美南吉の作品を選んで読み、図書室の新美南吉の棚に南吉おすすめコーナーを作りカードを掲示する。	○	◎	新美南吉の他の作品にある情景描写の工夫に気付いたり、人物の変化を叙述を基に想像したりしながら読み広げている。 【関①】	カード

1 1 本時の展開

(1) 本時の目標

兵十のごんに対する気持ちの変化をつかみ、二人のすれ違いの関係や悲しい心の交流について、叙述を基に想像する。

(2) 観点別評価規準

- ・ 人物（兵十）の気持ちや変化する過程を読み取り、叙述を基に想像している。
- ・ ごんと兵十の心のずれを指摘し、語句に着目した読み深めをしている。

(3) 準備物

一人読み用プリント

(4) 学習の展開

	学習活動	○指導上の留意事項 □支援	評価規準 評価方法
導入	1 本時のめあてを確認し、六場面を音読する。	○ 「引き合わない」と思いながら、ごんがどんな行動を取り、それに対して兵十がどうしたかを考えながら音読させる。	
	～語ろう「ごんぎつね」～ 人物の心や様子を表す語や文、情景を表す語や文に注目して読み、好きな場面を心をこめて語ろう。	○ 視点がごんから兵十に移っていることを押さえる。	
展開	2 一人読みをする。 〈一人読みの視点〉 ごんと兵十の相手に対する思いがわかる言葉に線を引きましょう。（ごんは赤線、兵十は青線） 線を引いたところで、自分が一番心に残るところに○をつけ、そこから想像したことや思ったことを書きましょう。	○ 一人読みの視点にそって叙述に線を引かせ、最も心に残る叙述からごんや兵十の互いへの思いを想像させる。 〈着目させたい言葉 兵十〉 ・ うなぎをぬすみやがったあのごんぎつねめが、またいたずらを ・ 「ようし」「おや」 ・ 「ごん、おまえだったのか。」 ・ ぱたりと、取り落としました □ 線が引けない児童については、これまでの学習で学んだ擬態語や複合語などに着目させ、行動描写から心情を想像させるようにする。	・ その明るく日も ・ こっそり中へ ・ 固めておいてある ・ ぐったりと ・ 目をつぶったまま うなぎ
	3 自分の読みを出し合い、ごんと兵十の相手に対する思いを比べ	○ 自分の心に残った叙述を基に想像したこ	・ 人物（兵十）

	ながら叙述を基に想像し、読み深めていく。 〈話し合いの柱〉 ① ごんの兵十への思い ② 兵十のごんへの思い ③ ごんと兵十の心の対比 （兵十のごんに対する呼び方に着目させる。） ④ 火なわじゅうをばたりと取り落とした兵十の心情	とを発表させる。まず、ごんの気持ちから出させる。 ・その明るく日も ・こっそりと ・うなずきました ○ 前日の夜二人の会話を聞いて「引き合わないなあ」と言いながらもその明るく日もくりを持ってきたごん、それに対して一場面での「ぬすどぎつね」という叙述を思い出させ、兵十の憤りや憎しみ、恨みの気持ちを叙述を基に読み取らせる。 ・ぬすみやがった ・あのごんぎつねめ ・「ようし。」 ○ 板書により二人の心のずれが比較できるようにする。	の気持ちや変化する過程を読み取り、叙述を基に想像している。 発言・一人読み
	〈うってしまった後の兵十の心情の変化〉 ・ぬすどぎつね あのごんぎつねめ 「ようし」 ↓ ・「おや」 ・かためて置いてあるくり→ なんてことをしてしまったのか。思いに初めて気付く。 ・「ごん、おまえだったのか」 おまえだったなんて。おれのことを思ってくりを持ってきてくれていたんだよな。それなのに。 ・ぐったりとうなずいた 何度も何度もおれのためにしてくれていたのにあのごんぎつねめという憎しみがこもった呼び方からくりを見て兵十の心に変化が表れている。 ・<u>ばたりと取り落とした</u> 体の力がぬけてしまって、心もからっぽ。火なわじゅうを持ってられないくらい自分のしたことを後悔している。何も言えない、言葉を失っている。何を言われても聞こえないような様子。気が抜けている。体が固まって動けない。		
	4 最後の一文「青いけむり」の表現の効果を考え最後のシーンをイメージ化する。	○ 兵十の心の変化、強い憎しみから深い後悔の念、茫然自失へと変化していく過程を読み取らせ、うってしまった後の兵十の後悔を倒置法で表現された会話を手がかりにしたり、兵十の表情などをイメージさせたりしながら話し合いを進める。 ○ 着目させたい言葉を基にした読みの発表を押さえ、火なわじゅうをばたりと取り落とした兵十の心情を十分想像させ読み深める。 ○ 青いけむりが出ている様子と、ごんと兵十の最後の姿を関わらせながらイメージ化させ、音読に生かすようにする。	・ごんと兵十の心のずれを指摘し、語句に着目した読み深めをしている。 発言
まとめ	5 まとめの音読をする。 ごんと兵十の心の変化を想像しながら音読してみましょう。	○ つぐないが通じてうなずいたごんの気持ちとともに、兵十の気持ちの変化を捉えながら音読させる。	

資料① 教室掲示 学習のあしあと

「こんぎつね

新美南吉

【一】

これは、おじいさんから聞いたお話です。

むかし——中山——山の中——わたしたちの村

「こんぎつね」というきつね

「こん

ひとりぼっちの小ぎつね

・しだのいっぱいしげった森の中

・あなをほって

いたずらばかり

・いもをほり散らしたり…たり…たり、いろんなことを

ある秋のこと

あなの中にしやがんでいました。

雨が上ると、ほつとして

○そらはからつと晴れていて、もずの音がきんきん…。

○辺りのすすきのほには、…。

○ただのときは水につかることのない、…。

雨上がり辺りの様子

・そうつと、じつと

・ぴよいととび出し

「兵十だな。」

・ぼろぼろの黒い着物

・円いはぎの葉が—まい、大きなほくろみたいに…

・ごみといっしょにぶちこみました

○その中には、しばの根や、草の葉や、…。

ちよいと、いたずらがしたくなつたのです。

・つかみ出してはボンボン投げごみ

・じれったくなつて口にくわえ

・びっくりしてとび上がり うなぎをふりすてて

・ほつとして…草の葉の上のにせておきました。

【二】

十日ほどたって、

・「ふふん、村に何かあるんだな。」と思いましたが

・「何だろう。…」考えながら

・「ああ、そう式だ。」と思いましたが

・「兵十のうちのだれが死んだんだろう。」

お昼がすぎると、

○いいお天気で、…。

○墓地には、ひがんばなが、赤いきれのように…。

○人々を通つたあとには、…ふみおられていました。

そう列の様子

・「ははん。死んだのは兵十のおつかあだ。」

思いながら

そのばん、

・あなの中で考えました。

「兵十のおつかあは、どこについていて、うなぎが食べたいと言つたにちがいない。…ところが、…。だから…。そのまゝ…ちがいない。…ちよつ、あんないたずらをしなけりやよかつた。」

・せまく暗いじめじめしたところ

・こどく

・さみしいからいた

ずりするんだ

・ひどいことをする

なあ。

・村人はかんかん

・ああたいくつだ
・ようやく晴れたなあ。

・天気もよくなつた

しどこにいこうかなあ。

・何か楽しいことは

ないかなあ

・心も体もうきうき

「うわあ、ぬすとぎつねめ。」と、どなりたてました。
・追っかけてはきません。

ここが読みのポイント！

□視点 ■表現

□語り手の視点から人物や情景が説明されているところを読む。

□ごんの身になって想像する。

□ごんの視点の移動

□ちよいといたずらをしたくなつたごんとうなぎを取られた兵十をくらべる。

■声喩

(擬態語・擬声語)

■様子をくわしく表す言葉(行動や様子を表す副詞)

■複合語

(二つの動作を一つにして表現した言葉)

□ごんの視点から情景を読む。

□ごんの思考の流れに沿って読む。(ごんの論理)

■目に見えるように表現した言葉・耳に聞こえるように表現した言葉

■色を表す言葉

■比喩

■類義語(似た意味の言葉「思う」「考える」)

■心内語(心の中で思ったことを話すように表現している言葉)

【三】
兵十が、赤いどの所で、

「おれと同じ、ひとりぼっちの兵十か。」

- ・ いわしをつかみ出して、
- ・ いわしを投げ込んで、…かけもどり
- ・ うなぎのつぐないに、まず一つ、いいことをした。

次の日には、ごんは、山でくりをどつさり拾って

- ・ ぼんやり
- ・ ほったたにかすりきず
- ・ どうしたんだろう
- ・ 「これはしまった。」
- ・ 「かわいそうに、…」 そつと回って

次の日も、その次の日も、ごんは、くりを拾っては、兵十のうちへ持ってきてやりました。その次の日には、くりばかりでなく、松たけも二、三本、持っていました。

【四・五】

月のいいばんでした。話し声が聞こえます。チンチロリン

- ・ 道のかた側にかくれて、じつとして
- ・ 話し声がだんだん近く
- ・ 二人の後をつけて

- ・ いどのそばにしゃがんで

ボンボンボンボン おきようを読む声

ごんは、お念仏がすむまで、

- ・ いどのそばにしゃがんで
- ・ 兵十のかげぼうしをふみふみ

「へえ、こいつはつまらないな。」

「…おれは、引き合わないなあ。」

【六】

その明るく日も、

- ・ くりをもつて
- ・ こつそり

かためて置いてある

ぐつたりと目をつぶったまま、うなずきました。

青いけむりが、まだ、つつ口から細く出ていました。

- ・ 一人でさみしいだろうなあ。
- ・ おれがおつかあうなぎを取ってしまつたからな。
- ・ よし、これで兵十も元気がでるはず。

- ・ いいことをしたと思っていたのに。
- ・ また、やってしまった。とんでもないことをしたな。はあ
- ・ あ…
- ・ すまないなあ。
- ・ 何とかしたい。
- ・ 喜ばせたい。
- ・ 今度こそはきっと兵十も喜ぶぞ

- ・ おれのことを言ってるぞ。
- ・ いったい何て言うのかな？ 気になるな。
- ・ 話の続きは？
- ・ なんて神様だと信じるんだ。
- ・ おれは何のためにくりをもっているんだらう。
- ・ ああ、残念だなあ。
- ・ せっかく持っていてやってくるのに。

- ・ 昨日あんなこと言われたけど。
- ・ 兵十はくりを待っているだろうな。
- ・ そつと置いて帰ろう。見つからないように。
- ・ 神様にお礼を言うかな。おれだとわかつてくれるといいのに。

- ・ ああ、ようやく兵十がわかつてくれた。
- ・ 兵十がやさしい言葉をかけてくれた。
- ・ おれの気持ちを分かってくれたんだ。

- ・ 今日はずかまえてやるぞ。
- ・ にくたらしいきつねめ。
- ・ 何のいたずらにきめたのか。
- ・ いたずらじゃなかったのか。
- ・ まさかごんが。
- ・ おれのためにくりを持ってきてくれていたのにごんを殺してしまつた…。
- ・ ごんのやさしさに気付かずに取り返しのでないことを。

□ ごんの視点に立っていいことをしたと思っていることやつぐないする気持ちを読む。

□ ごんの視点の移動

■ 心内語

■ 複合語

■ 反復（くり返し）を表す表現

「いったい、だが、…。いわし屋のやつに、ひどい目にあわされた。」

□ じつと耳をすませ息をひそめて聞いているごんの姿を思い浮かべ、ごんの身になって二人の会話を読む。

□ 「うん。」という言葉。

■ 目に見えるように表現した言葉・耳に聞こえるように表現した言葉

■ 直接気持ちを表すのではなく、行動から気持ちを想像できる言葉

■ 行動や様子を表す副詞

■ 心内語

■ 多義語（一つの言葉で多くの意味を持っている言葉）

うなぎをぬすみやがったあのごんぎつねめが

「ようし。」

- ・ うちの中を見ると

「おや。」

- ・ 「ごん、おまえだったのか。」

ぱたりと、取り落とししました。

□ ごんの視点から兵十の立場になつて読む。

□ 二人の視点で思いを比べて読む。

■ 反復を表す表現

■ 行動や様子を表す副詞

■ 呼び方の違い・心内語

■ 声喩（擬態語・擬声語）

■ 複合語

■ 倒置法

資料②「ごんぎつね」で読み取らせたい内容と読みの視点

	一	二	三	五・四	六
想像させたい内容 読み取らせたい内容	○薄暗い穴の中で耐えていたごんの様子・気持ちを想像する。 ○ちよいといたずらがしたくなつた時のごんの気持ちと川的情景を関わらせて想像する。 ○ごんのいたずらと兵十の怒りの思い違いに気付く。	○自分のいたずらと兵十のおっかの死を結び付けて考え後悔するごんの気持ちを読み取る。	○兵十に同情し、親しみを覚えるごんの心の変化を読み取る。 ○いわしを盗むという行為をさせたごんのつぐないの心とつぐないへの深まりを想像する。	○兵十がごんの償いに気付いてくれることに期待しながらつて行くごんのいじらしい気持ちを読み取る。 ○償いの気持ちで兵十に通じないもどかしさや悲しさを読み取る。	○引き合わないと思いがちながらも、くりを持つていくごんの気持ちを考える。 ○兵十のごんに対する憎しみ、恨みの気持ちを読み取る。 ○死と引き換えに心が通じ合うことができたごんの気持ちを想像する。 ○兵十の心の変化と悲しみを想像する。 ○物語の余韻を読み味わう。
叙述を基に想像しながら読むための力	・語りの表現の仕方に気付く(話者と作者を区別)。 ・時代背景とごんの境遇、性格、人物設定を把握する。 ・声喻を捉え場面の情景やごんが見た兵十の魚とりの様子、動きを思い描く。 ・話者とともに人物の目と心に重なるって同化しながら想像する。	・非日常的な村人の様子を読み取る。 ・擬態語や色彩豊かな表現の美しさに気付く、情景を思い描く。 ・心内語の表現から人物の変化を捉える。	・心内語の表現から人物の変化を捉える。 ・くには、くも、の使い方に気付く、ごんの兵十に対するつぐないの気持ちの深まりを想像する。 ・五感(視覚・聴覚)で捉えた情景描写から場面を思い描く。 ・表現方法(会話による表現方法)をつかみ場面の移り変わりや人物の気持ちを想像する。	・くり返しの表現に着目し、人物の心を捉える。くも ・視点の転換を捉え、兵十の視点から想像する。 ・心内語や行動の言葉から、人物の気持ちを対比的に捉え比べる。 ・呼称の違いや表現の違いを捉える。 ・複合語の意味の広がりや捉え、人物の気持ちの変化を想像する。	・複合語の意味の広がりや捉え、人物の気持ちの変化を想像する。
視点を捉えさせる	□語り手の視点から人物や情景が説明されているところを読む。 □登場人物の身になって想像する。 ・「兵十だな。」と、ごんは思いました。 □ごんの視点の移動 ・兵十が、向こうから、ちよいといたずらをしたくなつたごんとうなぎを取られた兵十の対比	□ごんの視点から情景を読む。 ・いいお天気で、 ・ちらちら見え始めました。 □ごんの思考の流れに沿って読む。(ごんの論理)	□ごんの視点に立っていいことをしたと思っていることやつぐないする気持ちを読む。 ・「いいことをした」というごんの行動を兵十の視点や読み手自身の視点から比べながら読む ・「おかげで、おれは」	□ごんの視点から兵十の立場になつて読み、二人の相手に対する思いの違いを比べながら読む。 ・そのとき、兵十は、ふと顔を上げました。 □二人の視点で思いを比べて読む。 ・うちの中を見ると、土間に、くりがかためて置いてある	□ごんの視点から兵十の立場になつて読み、二人の相手に対する思いの違いを比べながら読む。 ・そのとき、兵十は、ふと顔を上げました。 □二人の視点で思いを比べて読む。 ・うちの中を見ると、土間に、くりがかためて置いてある
表現を捉えさせる	■ 声喻(擬態語・擬声語) ・からつと ・きんきん ■ 様子やくわしく表す言葉(行動や様子を表す副詞) ・ほつとして ・そうつと ・びよいと ■ 複合語(二つの動作を一つにして表現した言葉) ・ほり散らし ・むしり取り ・どなりたて	■ 目に見えるように表現した言葉・耳に聞こえるように表現した言葉・色を表す言葉 ・ひがんばな ・赤い布きれ ・白い着物 ・白いかみしもをつけた ・赤いさつまいも ■ 比喩 ・赤いさつまいもみたいな ■ 類義語 ・「思いました」と「考えました」 ■ 心内語 ・「それで」「だから」「そのま ・「うちがいない」「くだつ」	■ 心内語 ・「おれと同じ、ひとりぼちの兵十か。」 ・どうしたんだろう「かわいそうに。」 ■ 複合語 ・投げこんで ・かけもどり ■ 反復を表す表現 ・次の日も、その次の日も、 ・その次の日には、くりばかりだけでなく、松だけでも	■ 目に見えるように表現した言葉・耳に聞こえるように表現した言葉・月のいいばん ・話し声が聞こえます。 ・チンチロリン、チンチロリン ・直接気持ちを表すのではなく、行動から気持ちを想像できる言葉 ・じつとして ・ふみふみ ・しゃがんで ■ 行動や様子を表す副詞 ・ひよいと ・びくつと ■ 心内語と多義語 ・「へえ、つまらないな。」「引き合わないなあ。」	■ 反復を表す表現 ・その明るる日も ■ 行動や様子を表す副詞 ・こつそり ■ 呼び方の違い・心内語 ・あのごんぎつねめが ・「ごん、おまえ。」 ・「ようし」か。 ■ 声喻(擬態語・擬声語・複合語) ・ぐつたり ・ぱたり ・取り落とし ■ 倒置法 ・「ごん、おまえだったのか。いつも、くりをくれたのは。」

新美南吉

ごん

「おれは、引き合わないなあ。」

その明くる日も

うちのうら
口から

こつそり中へ

すれちがい

「うわあ、ぬすどぎつねめ。」

兵十

② 兵十のぞんへの思い

【兵十のごんへの思い】

- ・ 本當にうらんでいゝ
- ・ にくたらしいやつだ
- ・ ごんの氣持ちなんて思ひも
しない
- ・ もうこれ以上悪さはさせない

うなぎをぬすみやがつた、
あのごんぎつねめが
またいたずらを

「ようし」

- ・何かとられていないか。
- ・何のいたずらをしにきたのか
- ・ごんのことよりも家の心配

かためて置いてあるくり
・やさしさ
・兵十を大事に思う
・くりが転がらないようにそつと
・いわしを投げこんだときとはちがう

うちの中を見ると、土間に
くりがかためて置いてある

「おや。」

③ 兵十とごんの対比

兵十のごんに対する呼び方は？

「ごん、おまえだったのか。いつもくりをくれたのは。」

ごんは、ぐったりと目をつぶったまま、うなずきました。

兵十は、火なわじゆうをばたりと、取り落としました。

【兵十の思い】

- ・体の力がぬけて ショック
- ・何も考えられない
- ・自分のしたことを後悔
- ・おれにとつて大事なごんだつたのに
- ・火なわじゆうを持っていられない
- ・どうしてうってしまったんだ
- ・自分をせめている

④ 兵十の思い

青いけむりが、まだ、つつ口から細く出ていました。